

## 言語の個別性と普遍性

—中国少数民族言語、米国先住民族言語、スラヴ系言語からの検証—

武内道子

言語研究センター主催による上記国際シンポジウムが11月17日(土)に、みなとみらいKUポートスクエアを会場に開催された。3人の、海外からの講演者によるトークと神大教員によるコメントーターの補足説明が続き、最後にフロアとの質疑応答がもたれ、タフな催しであった。

最初のトークは、中国中西部の貴州、湖南、広西チワン族自治区のあたりで数万人によって話されているDong(トン語)と北京語との、語順を中心とした文法の比較であった。講師の石林氏(南開大学、吉首大学)はトン語のネイティブ・スピーカーであり、文字を持たない、消え行く言語を自ら記述している貴重な存在である。氏の静かな中にも情熱的な語り口が印象的であった。午後の初めは、ネイティブ・アメリカン言語の一つ、北太平洋沿岸で話されているSalish語(の中の一つの方言)の研究家であるHenry Davis氏(British Columbia大学)のトークであった。精力的で緻密なフィールドワークに基づいて、本質的に理論言語学者である氏の考察は、Wh-疑問文というトピックに限定して、一見接点のない日本語とSalish語の、深いところでの共通性を見事に見せてくれた。Oh, brave new world! という思いであった。最後のスピーカー、横山オリガ氏(UCLA)は、tri-lingualとしての面目躍如というトーク、すなわち、ロシア語、英語、日本語からのデータを、gender現

象で「キル」というもので、そこに見事なタペストリーが仕上がった。彼女の、日本語による、パワーポイントを使用しているトークは、トピックの親しさともマッチして聴衆を魅了した。

私たちにはなじみの薄いことばについての話は、それぞれに興味深く、刺激的で、啓蒙的で、しかも楽しくさえあった。中国語や英語のように億単位の人々に話されている場合も、中くらいのロシア語の場合も、トン語の少数人種の場合も、Salish語のようにほんの数百人だけが使っている場合も、

2007 11/17 (土)  
10:30-17:30  
KUポートスクエア5階会議室  
入場無料(事前申込不要)/通訳有  
主催:言語研究センター  
(国際文化交流と言語科学)  
(代表:肥後達子)

開催地  
肥後達子(神奈川大学助教授)

トピック  
\*言語の個別性と普遍性  
-言語の個別性  
(トン語の文法と日本語について  
-北京語との比較を通して-)  
石林  
(南開大学/吉首大学)

本日のテーマ  
\*Where Salish meets Japanese:  
"Wh-questions in a strongly head-initial language"  
ヘンリー・デイヴィス  
(ブリティッシュ・コロンビア大学)

\*言語学にみられるジェンダー的現象  
横山オリガ  
(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

トピック  
肥後達子(神奈川大学)  
横山オリガ( UCLA )  
肥後達子(神奈川大学)  
石井正典(神奈川大学)

KUポートスクエア  
〒242-0292 神奈川県横浜市中区みなとみらい1-1-1  
クインズスクエア5階  
〒242-0292 神奈川県横浜市中区みなとみらい1-1-1  
クインズスクエア5階  
TEL 045-481-5661(代)

お問い合わせ  
TEL 045-481-5661(代)

神奈川大学  
http://www.kanagawa-u.ac.jp/



すべからく世界の言語は、使用者が思考し、互いの伝達を行うことを可能にする上で同じ程度の効率性を持っていると考えてよい、単語がホンの数百しかない「原始的な」言語などというものは存在しない、と改めて認識した。人間言語の華麗な豊かさを見せてもらった思いである。

内容の濃い、アカデミズムの高いシンポジウムであった。ひとえに、3人の講師の、ご自身の研究への愛と情熱に恵まれたこと、および講師と真摯に接触、交わりを重ねたコメンテーターを始めとする、運営委員（8名）の1年間にわたる尽力の賜物である。池上和夫副学長に開会のご挨拶をいただいたのも幸いであった。

言語センターの共同研究会として1997年以来活動を重ねている「対照言語学研究会」が、本シンポジウム「国際文化交流と言語科学」プロジェクトチームの母体である。そもそも、センターが2年前設立30年を迎え、紀要『神奈川大学言語研究』が本年度30号を発刊するということは何らかの形で記念にしたいという思いが、大学の国際交流事業への参加と結びついた。本シンポジウムでのトークを一方の柱に、研究会メンバーによる論文をもう一つの柱に、紀要の特集号を編むことになっている。したがって本プロジェクトは今道半ばである。来春3月の刊行に、引き続き所員各位のご支援を賜りたく、紙面を借りてお願い申上げる次第である。

\*\*\*\*\*

